

新制

人

117

学位審査報告書

(ふりがな)	にしや たかふみ
氏 名	西矢 貴文
学 位 (専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人博 第 477 号
学 位 授 与 の 日 付	平成21年9月24日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	人間・環境学研究科 共生文明学専攻
(学位論文題目)	
葦津耕次郎 －「国家神道」期における一神道人の軌跡－	
論 文 調 査 委 員	主査 教授 西山 良平 副査 教授 松田 清 副査 教授 元木 泰雄 副査 教授 阪本 是丸

人間・環境学研究科

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、葦津耕次郎（明治11〔1878〕－昭和15〔1940〕）の思想と行動を明らかにすることを通じて、「国家神道」の内実に迫ることを目的としている。本論文は序章・終章を含め、全7章から構成されている。序章では葦津研究の意義や資料の取り扱いを論じ、本論文の視座を確立する。とくに葦津研究の基礎資料である論文集収録の論説は原著にあたり、回顧録や回想は新聞・雑誌や政治家の日記などで客観性を担保することを述べる。また、関係者への聞き取りを精力的に行い、出来る限りの資料を収集することに努める。ついで、第1章・第2章・第3章では葦津の明治期・大正期の軌跡を時代順に検証し、第4章・第5章では対外観と国体観を分析している。

第1章では、葦津家の系譜と明治期の葦津を取り上げ、その思想の根幹が形成される過程を考察する。葦津は福岡県筥崎宮の社家に生まれた。その祖先の大神多門は、幕末期に福岡における神社祭儀を仏教支配から独立させること（神仏分離）を求めたが、福岡藩によって流罪に処せられ、罪人として死去した。多門の弟である大神嘉納の孫が耕次郎である。そのような家庭環境に育った耕次郎は、「回心」を経て神道に対する信仰を持つに至る。その契機は、筥崎八幡の靈験によって、父磯夫の病が癒された一種の神秘体験であった。また、信仰を確立させたのは、敵国降伏の神である筥崎八幡の神威によって、日露戦争における日本海海戦に勝利したと考えたことである。筥崎宮を通じた神道への絶大な信仰こそが、葦津の思想と諸実践を貫く根幹であり、第一の鍵であることが明らかにされた。

第2章では、大正期の諸活動について考察する。大正期の葦津は川面凡児の神道思想と出会い、自らの信仰を語る言葉を獲得した。時あたかも、土着的伝統的な国体観を有する人々の間では、思想悪化・国体の危機が声高に叫ばれていた。そのような状況の中で、葦津はあるべき国の姿をとりもどすため、川面教学を拠りどころとして、自らの神道信仰に基づいた言説を発表するようになる。川面教学は、葦津を理解する第二の鍵である。また、大正末期には、第一に敬神護国団を結成し、第二に純正普選運動に積極的に参加するなど、諸種の実際的な活動にも従事して、神道によって国体の危機を救おうとした。

第一の敬神護国団は、各家庭での神棚奉斎・国旗掲揚などを主張しており、大正12年（1923）の「国民精神作興の詔書」に触発されたものと考えられる。葦津は敬神崇祖を国体の根幹として、その振起を通してあるべき国の姿を取り戻すことを目指した。第二に、大正14年の普選法案は個人本位に基づいており、葦津はこの政府案に反対する。純正普選運動は、男女に関わらず家長（戸主）であることを選挙資格付与の条件とする。なぜなら、国家を組織する基本単位は「個人」ではなく「家」であり、その思想は敬神崇祖の精神と一体であるからである。敬神崇祖は葦津の思想や活動の中核であった。

第3章では、葦津が、宮崎の「八幡様のため」に手掛けた事業について考察する。葦津が直接に経営した事業としては、満州における鉱山業と国内の社寺建築業や、事業の始まりから深く関わった博多湾築港事業がある。それら事業経営の目的は、第一に「宮崎宮神威発揚に貢献せんが為」であり、第二に「自己及他人の国家的事業に貢献せんが為」であった。

第4章では、葦津耕次郎の対外観を取り上げるが、そのさい宮崎宮への信仰から導かれた「敵国降伏」論に注目した。宮崎宮はその地理的な位置からも、古代における朝鮮半島との緊張関係が創建の由緒にうかがえ、「敵国降伏」の神として信仰を集めるようになった。葦津は宮崎八幡の神威を高揚することが天皇の皇威を発揚し、日本の対外発展を約束するものと考えた。葦津の思想では、「敵国降伏」とは力による征服ではなく、相手国が「おのづから」に天皇の徳に服して帰順することであり、その結果、世界平和と世界民族の幸福が達成されると考えた。また、葦津は「韓国併合に反対した神道人」とされるが、彼の言説を精読すると、韓国併合の正当性を説きながら、一方では、それが政府の官僚主義によって道義を欠くことを批判していることがわかる。このような一見矛盾する見解も、その「敵国降伏」論を通して正確な理解が可能となった。

第5章では、葦津の国体観を考察した。絶対的な神道への信仰者である葦津にとっては、祭祀の復興こそが、危殆に瀕する国体を救う維新実現のための焦眉の急であった。祭祀が完全なる祭祀となり、その精神を体した政治こそが永遠の平和と幸福の実現を可能とする。このように、浪漫的ともいえる神道ユートピアを追求する葦津の姿は、同時代の昭和維新をめざす人々のなかにあって独特であり、国家神道期の神道人にも多様な側面があることが明らかになった。

終章では本論文の内容をまとめ、今後の課題として昭和期の葦津の諸実践の解明をあげる。

葦津は特色ある神道人である。国家神道は、近代日本思想の中核ともいえる天皇をめぐるイデオロギーと密接に関わるものである。葦津の軌跡は従来の天皇制イデオロギー論や国家神道論の枠組みを逸脱する側面が多く、その全体像の把握は国家神道の内実のみならず、近代日本思想の深奥に接近することにもつながるのである。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、「国家神道」期に活動した神道人である葦津耕次郎の思想と活動を丹念に復元し、そのことを通して国家神道や日本の近代思想の位置づけを目指したものである。近年、日本の近代社会の成立・発展に関して、文化史や思想史の観点からの見直しが盛んである。そのなかで、国家神道に関する研究は、1970年代の村上重良氏の業績が今なお多大な影響を与え続けている。この研究動向の中で、本論文は異彩を放っている。

本論文の第一の意義は、国家神道の制度史研究を前提に、国家神道期の神道人の思想を全面的に取り上げたことである。これまでの国家神道研究は、二つのタイプに分けることが可能である。一つの立場は、国家神道を包括的な国家的宗教制度と捉え、天皇制イデオロギーの注入装置と見做す見解である。最近では、国家神道の概念規定に関して、「宗教」や「神道」の概念に踏み込んだ研究がなされるようになった。もう一つの立場は、国家神道を神社が国家によって管理されている状態として限定的に捉える。この国家神道の制度史的な研究でも、その形成過程を論じたものや、明治維新期の国学者や神道系新宗教の教祖を扱った個別研究は数多く存在するが、国家神道期に種々の活動を展開した神道人に関する研究は数少ない。国家神道やその時代の全体像を明らかにするためには、個々の神道人の思想・信仰や実践を考察する作業が不可欠である。本論文はこの間隙を埋めることを目的とし、実際にそれに成功した。

第二の意義は、葦津耕次郎という神道人を取り上げたことである。葦津は明治末年から昭和戦前期に、主として在野の神道人として活動し、戦前期には神社界に一定の影響をもった。その長男葦津珍彦は、戦後の神社神道護持のために生涯を捧げ、右翼勢力の理論的支柱としての役割を果たした。そのため、「戦後最大の右翼理論家」と評され、正面からの研究は数少ない。つまり、葦津耕次郎の軌跡を跡づけることは、国家神道期の神道人の個別具体的実態を知るだけでなく、戦後神社界を支えた葦津珍彦の思想的淵源を窺知することにつながるのである。その耕次郎の全体像が、今回はじめて明らかにされた。

第三に、本論文は葦津耕次郎に関する既知の資料の信憑性を確かめ、さらに新しい資料群を発掘している。神道人や、いわゆる右翼と称される国家主義活動家の研究の立ち遅れの原因の一つは、資料に関する制約である。多くの神道人は信仰に基づいて思想を形成し、それが諸々の実践活動を惹起した。そして、思想内容をまとめた文書として書き遺していることは稀であり、実践活動に関しても同時代資料を用いて実証的に跡づけることはたいへん困難であった。葦津耕次郎に関しても同様であり、十分な先行研究すら存在しない。また、葦津に言及している諸論でも、ほとんどが本人の回顧録および論文集に再録された言説に基づいている。そこで、本論文では、出典が明記されていない論文集の論説について、可能な限り、原著にあたるように努めた。また、回顧録や回

氏 名	西 矢 貴 文
-----	---------

想は、同時代の日記・新聞・雑誌などによって裏付けをとった。このように資料の信憑性を確保するとともに、関係者への聞き取り調査を実施するなどして、可能な限り実証的に思想と行動を論じている。

第四に、以上のような方法と資料の徹底した収集によって、葦津耕次郎に固有の思想と実践の全貌が解明された。とりわけ、第4章では、「韓国併合に反対した神道人」という評価に関して、葦津の対外観を分析した結果、葦津の真意が、韓国併合の正当性を認めながらも、それが政府の官僚主義によって道義を欠くことを批判していることが論証された。第5章では、国家組織の基本単位が「家」とされ、天皇を中心とした国家観が示される。このような家族国家観は、当時の日本で広く見られるが、葦津は真の国体顕現のための「維新」は、祭祀の復興による祭政一致の実現のみによって可能であると考え、当時の官僚主義的神社界を鋭く批判した。それは同時代の昭和維新をめざす人々のなかにあって独特な思想であり、国家神道期の神道人にも多様なあり方があることが判明した。

第五に、葦津耕次郎の実証的な研究を通じて、従来の国家神道研究からは充分に知り得なかった神道人の全容が明らかとなり、新しい近代神道・思想論を開拓する手掛かりを得ることとなった。ここから、日本の近代思想の見方に再考を迫ることが可能と考えられる。

以上のように、本論文は文献資料の制約を乗り越え、葦津耕次郎の特色ある思想と行動の全容を実証的に分析し、従来は充分に知られなかった国家神道期の神道人の実態を明らかにした。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成21年7月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。